

Almanac of the Dead における Sterling の成長

“The Indian Ring”と石の蛇

大宅由加利

Leslie Marmon Silko は、小説 *Almanac of the Dead* (以下 *Almanac*) で、南北アメリカ大陸における5世紀以上にわたる先住民と白人の歴史を征服者された側の立場から描く。作品では、長きにわたり剥奪されて来た先住民の権利を取り戻すための様々な動きが、アメリカ南西部アリゾナ州トゥーソンを中心に繰り広げられる。トゥーソン郊外の古びた大牧場では、先住民ヤキ族の血を引く双子の姉妹が、「死者の暦」を守り、解説しようとしている。「死者の暦」は、先住民の歴史が詰まる予言の書であり、先住民の古くからの教えを守ることの重要性が記されている。羊皮紙のようなものや紙の束などから成り、あらゆる部族が時に命がけで守って来たものである。*Almanac* において夥しい数の登場人物が描かれる中で、今回は初老のアメリカ先住民男性 Sterling に焦点を当てて、従来あまり注目されなかったその成長を二点からとらえる。Sterling の成長の第一点は、彼が実体験と重ね合わせて、“The Indian Ring”などのトゥーソンでの権力者が行ったからくりを見抜くようになる過程である。馬場美奈子が、Sterling が犯罪読み物雑誌からトゥーソンの商人がアパッチ戦争を故意に長引かせて利益を得ようとしたことを語ったことを取り上げ、Sterling と同僚の交流場面におけるアメリカ史の修正に言及しているように(馬場 207-208)、Sterling はトゥーソンの史実を読者に知らせる重要な役割を担う。開眼した Sterling は、自分がかつて部族から追放された実相も理解するようになる。Sterling の成長の第二点は、石の蛇に象徴されるアメリカ先住民の教えへの回帰と平和的生き方の選択である。その証しとして、Sterling は自分の教育や考えの中心となっていた白人社会とその価値観との決別を選ぶに至る。

また、攻撃的で印象の強いリーダー格の主要人物が多い中で、平凡で真面目な視点でトゥーソン社会を観察し、暴力や犯罪の場面を垣間見る Sterling は、物語の中で重要な役割を担う。それは、物語の構造上において、彼は最初の場面から登場し、唯一、最終場面でも登場する人物であり、作品の枠組みに存するといえるからである。Sterling という名も意義深い。“sterling”という語には、“sterling character”に用いられるように、主要人物としての意味がある。また、“sterling silver”のように銀の純度の高さを表す語でもあり、“sterling”には、“thoroughly excellent, capable of standing every test” (OED 2nd ed. XVI. 655) という意味もある。こうしたことから、作者 Silko が Sterling を純粹で、試練に耐え得る特別な人物として造形していることが分かる。

そのうえ、Sterling はこの小説で、唯一 Silko と同じ部族、アメリカ南西部ラグーナ・プエブロ族出身である。作品には残虐で貪欲な人物が多く登場する中であって、Sterling は数少ない温厚で善なる人物である。その Sterling が鉄道での仕事を引退後、帰郷すると、「法」を侵していないにもかかわらず部族委員会によって追放され、そのことで人生が大きく変化する。なぜ自分が「無実」であるにもかかわらず追放になったのか理解できないまま、彼は故郷を離れる。Sterling は偶然にもトゥーソンでバスを降り、「死者の暦」を守る怪しげなヤキ族の女性の双子が住む古びた大牧場に「庭師」として雇われる。彼は、かつてインディアン寄宿学校で同化政策のもと、白人社会の法や価値観の強い影響を受け、自身の内面にある先住民の教えに目を向けていなかった。トゥーソンには、民衆の憧れの的だった白人の銀行強盗ジョン・ディリンジャーや、南西部アパッチ族の英雄ジェロニモの歴史にまつわる場所がある。新聞や雑誌の犯罪記事を読むのが趣味の Sterling にとって、トゥーソンは当初は憧れの街であった。大牧場に来た当初の Sterling の様子からは、違法なことが潜むその場所で働くには純粹すぎることに、つまり Sterling が犯罪とはかけ離れた人物であり、喪失感を抱える存在であることが分かる。

Sterling は、トゥーソンの街を訪ね、今まで雑誌でしか知らなかった街の雰囲気を目の当たりにし、犯罪の匂いと権力者の企みを肌で感じ、社会のからくりが気がつく。まずこの慧眼が、Sterling の成長の一過程といえる。トゥーソン商人たちによる“The Indian Ring”は、ジェロニモに政府から逃げるように警告し、アパッチ戦争を何年も長引かせた結果、莫大な富を築く。Sterling は、この“The Indian Ring”に縁のある場所を実際に巡りながら、権力者たちの貪欲さと卑劣さを経験的に理解する。また、トゥーソンと関連する白人の銀行強盗ディリンジャーのエピソードから、公平さや正義の下で法が施行されないことがあることを悟る。その結果、Sterling は、自分が法的には無実であるにもかかわらず、部族の権力者たちに裏切られて追放が決定されたという認識に達する。追放の実相について述べると、Sterling が鉄道の仕事を引退した時期に、故郷では、突然巨大な石の蛇が出現する。この石の蛇は、岩が蛇の形に長く浮き出たもので、部族にまつわる神話に関係した聖なるものである。この作品では出現の理由は、母なる大地を穢し続ける人間への警告とみなされる。石の蛇出

現の噂が広まり、ハリウッド映画スタッフが撮影しようとしてやってくる。Sterling はかつてカリフォルニアで働いていたことがあるので、白人への対応に慣れているだろうという理由で、部族から白人との対応窓口に任命され、白人が聖なる石の蛇を穢すことのないよう、立ち入らせないようにと指示されていた。しかし、Sterling は聖なるものを撮影させた共謀者として責任を問われ、追放を言い渡される。過去において部族の聖なるものが白人の収集家たちに奪われて来たという憎しみの感情も加わり、非難の的となるのである。孤独の中、彼は故郷を離れるが、トゥーソン社会の成り立ちに開眼した結果、自分が追放されたのは、最初から自分をスケープゴートにするものとして、仕組まれていたからだ気づく。これが Sterling の一つ目の成長である。一方で彼は、石の蛇を映像に撮ることは聖なるものを穢すことだという先住民の考えを知らなかった自分を責め、先住民の古くからの教えに目を向けるべきだったと後悔の念にかられる。それが第二の成長へとつながるのである。

Sterling は、トゥーソンの成り立ちを理解するとともに実際の暴力的場面を経験し、かつて傾倒していた白人社会における暴力や貪欲さに嫌気がさすようになる。松永京子は、Sterling が「近代的暴力や破壊行為が集中するトゥーソンを経験していること」（松永 135）について述べ、また Sterling の視点の転換について、「スターリングが破壊の文化の一部ではなく、地球の循環的なエネルギーの一部として生きることを可能にする」（松永 152）と論じる。トゥーソン体験が、先住民としての生き方に目覚めさせたのである。作品の最後で Sterling は牧場の雇い主や同僚とともにトゥーソンを去った後に、雇い主に一緒に来るように誘われるが断り、故郷ラグーナに戻ることを選ぶ。帰郷して、石の蛇が存在する場所を訪れた Sterling は、そのすぐ近くのウラン鉱山の跡地に向かって歩きながら、かつて部族の長老たちがその建設が母なる大地を穢すことになると警告したことを振り返るに至る。そして、ウランの露天掘りの痕からウランが塵のようになって水脈へと降り注ぐ姿を発見する。つまり、石の蛇は部族の古い教えの象徴であり、Sterling はその教えにたどり着いた唯一の人物である。ウランの粉塵からの水質汚染に気が付いた Sterling は、その後、大地を穢す暴力は必ず人間に戻って来ること、母なる大地は人間を含めた何者によっても穢されないことを心に刻む。これこそが、彼が先住民として母なる大地とつながった瞬間である。小説の最後で、ラグーナ・プエブロ族の居留地から隔たった牧草地に一人いる Sterling は、自分の生き方の指標にしていた白人社会の雑誌の定期購読をやめる。自分を誹謗するゴシップも気にしなくなる。石の蛇がなぜ出現したのか、そのメッセージの意味を理解したためである。Sterling にとっては白人文化の象徴である雑誌の定期購読をやめたことが、この作品の最後に描かれているのは、彼が白人社会の価値観から自分を解き放し、アメリカ先住民としての自信を取り戻した証しであるといえる。これが、Sterling の二つ目の成長の結果であるといえる。暴力や犯罪から遠く離れることを選び取り、先住民の古くからの教えこそが平和的に生きる道を示すことを認識し、その生き方を選択したのである。

今回は、Sterling に注目して、従来ほぼ等閑視されてきたその成長について、検討した。非暴力的で善なるアメリカ先住民、シルコウと同じラグーナ・プエブロ族出身の Sterling は、その名のとおり試練に耐えうる人物であり、純粋さを失わぬまま自分の身に起こった真実をつかみ取り、先住民としての自信を取り戻すに至る。彼はトゥーソンでの実体験を通じて、“The Indian Ring”に代表されるような権力者のからくりを見抜く慧眼を持ち、自分の追放の実相に迫る。その結果、石の蛇に象徴されるアメリカ先住民の古くからの教えこそが、平和的に生きるための知恵であることに気づく。Sterling が自分の教育や考えの中心となっていた白人社会とその価値観との決別をみずから選んだことは、その証しだといえる。

引用文献

Silko, Leslie Marmon. *Almanac of the Dead*. New York: Penguin, 1992.

馬場美奈子『現代ネイティヴ・アメリカン小説―描きなおされる「インディアン」』英宝社、2008年。

松永京子『北米先住民作家と〈核文学〉—アポリカスからサバイバンスへ』英宝社、2019年。